

◎「自然と親しむ吟行会」の藤川宿と紫麦の説明資料です。参加される方は吟行前に熟読してください。

◆藤川の地名の謂れ

藤川の名前の由来は、二つの説があります。一つ目は、かつて宇治川と言っていたのを、山藤が見事なことにより藤川と改めたという説。江戸時代の「武蔵野路草」という書物に出ています。二つ目は、縁川（ふちかわ）が、当て字で藤川となった説。縁川は、川の縁という意味です。藤川宿に沿うように山綱川（国道一号線と名鉄電車の間）が東西に流れています。

不二川と書いた書物もあります。現在は岡崎市藤川町です。

◆藤川宿（東海道）

藤川宿は、品川宿から数えて三十七番目の宿場町です。慶長六年（一六〇一）に伝馬朱印状が発給されて宿場町となりました。東から、御油・赤坂・藤川・岡崎・池鯉鮒の順となっています。

発足当時、隣の岡



崎宿は、規模が大きく繁盛していました。規模が小さい藤川宿は、利用者が少なく苦しい経営でした。そこで、慶安元年（一六四八）に、隣の村から六十八戸を宿の東に移転して、規模を大きくしました。

天保十四年（一八四三）の記録では、家並約一km、戸数三〇二、本陣、脇本陣各一、問屋場一、旅籠三六、人口一二一三です。

◆麦の種類

日本で作られている主な麦は、大麦、小麦、燕麦、ライ麦（生産少）です。大麦と小麦の名前は、その粒の大きさによるものではなく、用途の広さによるものです。



燕麦



大麦



ライ麦



小麦

・大麦（グルテン少）：麦飯、味噌、醤油、

ビール、蒸留酒、麦茶、水飴など
 ・小麦（グルテン多）：パン、麺、和洋菓子、天ぷら粉など

・燕麦：飼料、オートミールなど
 ・ライ麦：パン、飼料など

大麦は、裸麦と皮麦に分けられます。裸麦は、揉むとすぐに殻が取れます。皮麦は、殻と実がくっついていてそのため、揉むだけでは殻は取れません。

麦の実から伸びている長いひげは、禾（ぎ）と言います。芒とも書きます。

◆紫麦

紫麦は大麦の仲間です。現在、藤川で作られている紫麦は、大公館（だいこうかん）、露（つゆ）、妻町糯（つままちもち）、徳島糯（とくしまもち）、紫裸（むらさきはだか）の五種類です。大公館は中国産で皮麦です。後の四種類は日本産で裸麦です。

紫色が一番美しいのは大公館で、穂だけでなく、茎や葉も鮮やかな紫になります。禾も長く優美な姿をしています。見頃は、五月中旬の「むらさき麦まつり」の頃です。藤川では、この大公館を一番多く作っています。紫麦を原料とした商品開発を行っています。これまで開発した商品は、紫麦焼酎、饅頭（紫麦は20%）、蕎麦、煎餅、饅

頭、いろいろ、ケーキ、クッキー、五平餅、甘酒、麦茶などです。これらは、藤川の道の駅、売店、コンビニで購入できます。

いつ頃から藤川で紫麦が作られるようになったのでしょうか。残念ながらそれは記録がなく、始まりは分かっています。しかし、江戸時代の書物「東海道名



所記(一六五九)には、高野麦(こうやむぎ)という名で藤川の紫麦が出てきます。高野麦は、紺屋麦とも書かれています。同じく江戸時代の「本朝食鑑(一六九七)」という食物図鑑にも藤川の紫麦が出てきます。紫色で愛でられたが、小粒の麦で美味しくないと書いてあります。

藤川の紫麦は、戦後まで細々と作られていました。しかし、やがて作られなくなり、ついに幻の麦となりました。作られなくなったとはいえ、戦後まで続いていたわけですから。美味しくないのでしょいか。それは、薬用、染料、観賞用として作られていたか

らだと言われています。しかし、はっきりとは分かっていません。

平成六年に、「藤川まちづくり」の一環として紫麦を復活しようと、県の総合農業試験場から紫麦五品種、二十数鉢分の苗を分けてもらいました。そして、平成十一年に作付け面積を大幅に増やし、商品開発を始めました。平成十三年、東海道五十三次宿駅制定四百年を期に、「むらさき麦まつり」を立ち上げ、紫麦を藤川のシンボルとしました。以後、現在に至ります。

藤川は、紫麦を通して、多くの学校と連携しています。その学校を紹介します。

- ・岡崎市立藤川小学校「総合学習の授業、「むらさき麦まつり」参加(和太鼓演奏、ウォーキング宿場案内)」
- ・岡崎市立東海中学校「紫麦栽培、紫麦工房(商品開発の工房)見学・講話聴講、むらさき麦握り飯試食」
- ・愛知産業大学「講義聴講、「むらさき麦まつり」スタッフ、むらさき麦創作発表会参加、「米屋」改修工事」
- ・愛知学泉短期大学「「むらさき麦まつり」参加(紫麦団子作り)、むらさき麦料理教室、むらさき麦食育講座」
- ・愛知県立岩津高等学校「講義聴講、むら

さき麦弁当創作、むらさき麦調理実習、むらさき麦ドライカレー販売(高校生F級グルメ甲子園)

- ・愛産大三河中学校「紫麦工房見学・講話聴講、むらさき麦握り飯試食、むらさき麦種蒔(オナー畑)」
- ・竹の子幼稚園「むらさき麦の種蒔・脱穀、むらさき麦踊(運動会)」

◆芭蕉句碑(紫麦句碑)

西棒鼻(藤川小学校の前)のすぐ西南(右斜め前)の角に十王堂があります。その境内に、「爰(ここ)も三河むらさき麦のかきつはたはせを」の句碑があります。句意は、「ここも三河なんだなあ。紫麦が杜若のように見える。」です。

松尾芭蕉は、何度も東海道を往来していません。記録を調べますと、藤川宿を少なくとも九回は通過しています。句意からすると、八橋(知立市)の杜若を見たのち、



藤川の紫麦を詠んだように思われます。実際、芭蕉は八橋に立ち寄っています。また、

「かきつばた」が、「垣内畑(かいつばた)」
とかけているという説があります。そうだと
しますと、芭蕉は、はじめ談林派に所属
していましたから、初期の句ということに
なりません。しかし、確証があるわけではな
く、現在、考証中といったところです。

芭蕉句碑は、新旧の二碑が建っています。
大きい方が新碑で、その右隣の小さい方が
旧碑です。

旧碑は、大正初期にこの地に移されてしま
した。残念ながら建立年月日は記載されてい
ません。しかし、芭蕉没後、五十年または
七十年の建立ではないかと言われています。

新碑は、芭蕉句碑の中でも最大級です。
そして、「寛政五歳癸丑冬十月 当国雪門月
亭其雄并連中 以高隆山川之石再建之」岡
崎石工 久右エ門町 弥吉」の文字が見え
ます。「寛政五歳癸丑冬十月」(一七九三)
は、芭蕉が没して百年忌に当たる年です。

「当国雪門月亭其雄并連中」は、服部嵐雪
の流派で、大島蓼太の系統に属していた舞
木(現岡崎市舞木町)の其雄と本宿(現岡
崎市本宿町)の美三たちとされています。

「爰も三河…」は、芭蕉の句とされています
すが、確かな証拠はありません。最近では、
芭蕉ではないという説も出ています。「校本

芭蕉全集 第二巻 発句編(下)」「富士見
書房)では、芭蕉の句とされていながら、
なお疑わしいものの中でも、この句は確実
性があるとしています。また、芭蕉真筆の
短冊「前書き(やつはしにて) こゝもす
るか紫麦のかきつばた」が存在しています。
地元では、この二つの句にはつながりがあ
り、確たる芭蕉句碑も建てられているので、
間違いなく芭蕉の句であると考えています。

◆藤川の松並木(東海道)

西棒鼻をさらに西に向かい、踏切を越え
ると藤川の松並木に
出ます。松並木は、
約1kmの間に黒松が
約九十本あり、道幅
は当時のままです。

街道を並木にした
のは、次の四つの理
由が考えられます。

- ①夏の日差しや冬の風雪から旅人を守る。
- ②風雨や日差しから道そのものを守る。
- ③並木沿いに歩けば迷うことがない。
- ④並木を切り倒して敵を防ぐ。

◆吉良道の道標

西棒鼻を西に行くと、踏切の手前に道標
があり道が二つに分かれます。左は県立東



高校に行きますが、この道を吉良道と言
います。吉良道は、塩の道(塩や海産物を運
ぶ道)で、吉良(現西尾市吉良町)、西尾(現
西尾市)、土呂(現岡崎市福岡町)、藤川、
遠く信州まで続いています。藤川は、東
海道と吉良道がつながる交通の要所でした。
吉良は、忠臣蔵の敵役吉良上野介公の領
地です。吉良公は、地元では名君として名
高いです。農民のため隣の藩主に頭を下
げ、黄金堤を築き上げ、水害から農民を守
りました。また、農耕馬の赤馬に乗り、よ
く領地を見回っていました。赤馬の殿様と
親しまれ、和菓子や玩具になっています。
ここ藤川には、「茶壺の涙雨」という伝説
があります。それは、御茶壺道中(正式名
は宇治採茶使)でここを通ると、必ずしと
しと雨が降ってくるというものです。そ
の謂れは、次のように伝わっています。

徳川家康公は、三
河一向一揆を平定し
た後、京都の宇治か
ら製茶業を営む上林
政重(竹庵)を呼び
ました。そして、土
呂の地に茶畑を開き
ました。(今はありま



せん」ところで、御茶壺道中のお茶は宇治の産です。つまり、宇治のお茶と土呂のお茶は兄弟の間柄です。また、御茶壺道中の茶壺は、幸田の大草（現額田郡幸田町大字大草）の土中から見付かり、「初花」と名付けられて、家康公に献上されたものです。吉良道に差し掛かると、茶壺が故郷に近くなつたと、懐かしがって涙を流すというわけです。

余談ですが、上林政重は、その後宇治に戻り製茶業を続けました。そして後に、上林家が、御茶壺道中の総責任者を代々務めるようになります。ペットボトルのお茶「綾鷹」は、その上林家につながるものです。歴史に出てくる「初花」は、天下三肩衝（かたつきⅡ茶入れ）の一つです。はじめ織田信長公の持ち物でしたが、巡り巡って家康公の持ち物となります。

◆吉良道分岐点の観音様

石造の十一面観音様で、南無阿弥陀仏と彫られています。

◆麦殻の葺屋根

現在は、黒っぽい波板トタンで屋根が被われています。

◆一里塚跡

一里塚は、日本橋を起点にしています。

街道の両側に一里ごとに土を盛り、榎を植えました。旅人に道のりが分かるようにするためと、榎の木陰で休めるようにしたものです。藤川の一里塚は残念ながら残っていません。南側は一八三〇年頃、北側は昭和の初期に枯れてしまいました。

◆十王堂

西棒鼻のすぐ西南（右斜め前）の角に十王堂があります。創建は、宝永七庚寅年七月（一七一〇）の頃と思われます。十王は、冥界において亡者を裁きます。その十王には本地仏があります。つまり、

十王は垂迹身というわけです。本地（ほんじ）と垂迹（すいじやく）というのは、本地である仏や菩薩が、仮の姿（垂迹身）となつて現れることです。

以下、十王の名（本地）…審理日…審理内容を書きます。



- ・秦広王（不動明王）…七日目…殺生
- ・初江王（釈迦如来）…十四日目…窃盗
- ・宋帝王（文殊菩薩）…二十一日目…邪淫
- ・五官王（普賢菩薩）…二十八日目…妄語
- ・閻魔王（地藏菩薩）…三十五日目…六道の行き先

・変成王（弥勒菩薩）…四十二日目…六道決定後の生まれ変わる場所

・泰山王（薬師如来）…四十九日目…生まれ変わる姿や寿命

・平等王（観音菩薩）…百日目…再審救済

・都市王（勢至菩薩）…二年目（一周忌）…再審救済

・五道転輪王（阿弥陀如来）…三年目（三回忌）…再審救済

六道というのは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六つです。閻魔王が、この六つの中から亡者の行き先を決めます。重大な決定のため、十王の中で閻魔王が特に有名になりました。

◆西棒鼻

棒鼻（ぼうばな）というのは、宿場町の入口のことです。棒の端、棒の先端という意味で、宿場の境に傍示杭（ぼうじぐい…傍とも書く）があるのでこう言います。傍示杭というのは、境界の印に建てられた四

角柱の標柱のことで、棒鼻に立てられています。東棒鼻の歌川広重の浮世絵にも描かれています。

脇にある歌碑は、広重の師匠である歌川豊広の描いた浮世絵の中にある狂歌です。

「藤川のしゆくの棒はなみわたせば杉のしるしとうで蛸のあし」と書いてあります。

意味は「藤川宿の棒鼻を見渡すと、杉の木で作った表示が立ち、付近の店には、

西浦、吉良から持ってきたうで蛸を売っており、蛸の足がぶら下がっている」です。

この狂歌は、傍示杭を「杉のしるし」とし、ぶらりと下がる「うで蛸のあし」と、藤の花が下がっている様子をかけています。茹で蛸の足は濃い紫色ですので、藤の花とかけたのでしよう。

「藤川宿のうでだこ」は、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」にも出てきます。引用しま



す。「かくて藤川にいたる。棒鼻の茶屋、軒ごとに生肴をつるし大平皿鉢みせさきにならべたて、旅人のあしをとどむ。弥次郎兵衛『ゆで蛸のむらさきいろは軒毎にぶらりとさがる藤川の宿』弥次さん、庶民にしては教養が高く、狂歌になつています。

◆伝誓寺

伝誓寺には、左甚五郎作と言われている「彫り竜馬」という欄間があります。

また、額に穴の開いた高さ五〇cmほどの仏頭があります。この仏頭には次のような伝説があります。

昔、泥棒が、他所の寺から額に水晶がはめ込んである仏頭を盗みました。そして、藤川の山に逃げ込みました。泥棒は、山伝いに逃げようとしたのですが、どこまで行っても、山から抜け出すことができませんでした。泥棒は「これは、この仏の水晶が、このの山に合図して、自分を歩けなくしてのだろう」と、仏頭の額にある水晶を刃物でえぐり取りました。すると、生温かい水のようなものが、



泥棒の顔や胸にべっとりとつきました。それは、真つ赤な血でした。水で洗っても、どうしても額の血だけは取れませんでした。泥棒は悲鳴を上げて、仏頭と水晶を捨てて、来た道を逃げ帰りました。しかし、額の血が証拠となり捕らえられました。

◆藤川宿資料館（脇本陣跡）

資料館の門は、修復してあります。当時の脇本陣（橘屋）のもので、宿屋で門構えを許されていたのは、本陣と脇本陣だけです。脇本陣というのは、本陣

の予備という意味です。展示物は、宿場の模型、高札、古民具、本陣の図面などです。資料館の裏側には見所が三つあります。

①石垣があります。この石垣は本陣の石垣で当時のものです。

②大公館、露、妻町糯、徳島糯、紫裸の五種類の紫麦を見ることが出来ます。



カラムシ

③苧（カラムシ）の自生が見られます。



芋の茎の皮から繊維が取れます。六千年前（縄文時代）から、衣類、網、紐などに利用されてきました。江戸時代、藤川の土産として、芋のかんざし、網袋、紐などがありました。



芋のかんざし

◆銭屋

江戸時代の商家です。間口、奥行き共に六間。前面より二間幅を二階としていました。街道に面して格子があり、大屋根が出ていました。樋がなく、屋根の雨水は、溝に落ちるようになっていたと言われています。

◆米屋

米屋は米を商い、宿内では規模が大きく、米倉三棟と長屋を別棟に持っていました。屋根の両端には卯建（うだつ・税とも書く）があり、火災から類焼を



防ぐようになっていきます。

当時、卯建を設置するには、税を納めなければなりません。「税が上がりできない」という言葉は、その税を払うことができないという意味です。転じて、地位や生活がぱっとしないという意味になりました。築一五〇年の米屋が、昨年リニューアルしました。

◆本陣跡

本陣とは、江戸時代、公家や諸大名などの貴人が使用した宿舎で、宿場町公認の休泊所でした。普段は、普通の旅人も宿泊することができました。

建物は、本陣としては珍しい桧皮葺で、北側に残る石垣により、当時の規模を知ることができません。屋敷内には、薩摩藩士が掘ったといわれる飲料水の井戸がありました。



本陣森川家は菅原家の子孫で、三河国宝飯郡御油に居住していました。孫八郎は家康公に仕え、御油から岡崎まで十八kmの間に早鐘九つを吊し、急を知らせたという功績がありました。後に森川喜太郎が藤川に

移ったと言われています。

藤川宿の本陣は、もともとは二軒ありましたが、江戸時代後期には一軒となり、森川久左衛門が勤めていました。建物は、昭和の中頃まで残されました。現在は整備されました。現在は整備され、案内板、高札のレプリカ、紫麦の畑があります。「むらさき麦まつり」の会場にもなります。紫麦の饅頭、お握りなどの試食ができます。販売もしています。

◆旅籠つる屋跡

現在は斎郷邸となっています。当時藤川宿にあった七軒の大宿のうちの一つでした。二階は大名の行列を見下さないように細目の格子となっていました。通庭の構造を持ち、入口は大戸を引いて戸口としていました。

◆問屋場跡

問屋場は、宿場の中心的な役割を行う所です。人馬の継ぎ立て（伝馬）、書状の递送



現斎郷邸



(飛脚)などの業務を行っていました。藤川宿では、ここを御伝馬所とも称していました。横12.6m、奥行36.9m、部屋数も多く、中庭がありました。明治の頃には手習い所として使われました。昭和二十七年に



改築され、小林邸となり現在に至ります。

◆高札場跡

高札場の広さは、4.5m×1.8mでした。

藤川には六枚の高札が残っており、すべて正徳元年(一七一二)のものです。その



の六枚は、「藤川よりの駄賃並人足賃」、「駄賃並人足荷物次第」、「親子兄弟夫婦みな親しく」、「切支丹禁制」、「毒薬にせ薬種売買の事禁制」、「火付け用心」です。うち三枚が資料館に展示してあります。レプリカは本陣跡にあります。

◆明星院

明星院の門は、イヌマキのアーチです。この寺には伝説があります。家康公は、戦で見知らぬ武士に助けられました。その

武士は敵の矢で片目を潰されていて、やがて消えてしまいました。後日、家康公が明星院に参拝した折、堂内の不動尊の目が潰れているのを見て、あの時の武士は不動尊の化身だったと感謝しました。

◆東棒鼻

藤川宿の東の入口を示す東棒鼻は、今も昔も藤川宿の象徴です。歌川広重が描いた幕府の一行の棒鼻の様子が、再現されています。宿場の門として、入口に築かれた宿囲石垣(棒鼻の道の両端の石垣)や傍示杭、表札、柳など、当時を偲ぶことができます。

東棒鼻を西に行くとき、すぐ曲手(かねんて)になります。曲手とは、直線状に来



た道を直角に右に曲がり、また左へとクランク状に曲がる道のことです。別名「柵形」とも言います。藤川宿の曲手は、慶安元年(一六四八)に、

三河代官が宿の東

端に造りました。約五〇〇mほどの街道となつていきます。そして、その曲手に隣の村から六十八戸が移転してきました。

その東のはずれの道を、意識的に曲げたのには、二つの理由が考えられます。一つ目は、外敵から宿場町を守るためです。二つ目は、道を曲げることによって、街道を長くし、そこに住む人を増やすためです。

◇その他

- ・今年の「むらさき麦まつり」は、来週の五月十六日(土)に開催されます。
- ・家康生誕四百年を記念して、五月二十四日(日)に、田圃アートが行われます。色とりどりの苗を植え、絵をかきます。
- ・「藤川宿を詠む」俳句コンクールが、毎年行われています。投句箱は、十王堂の横、藤川宿資料館にあります。(新井酔雪)

